

華人のイスラム教への改宗(1950-60年代)に見るマラヤ地域の社会と国家

篠崎 香織

『カラム』に映し出された華人系ムスリム

『カラム』には、数は少ないが華人ムスリムをとらえた写真記事が掲載されている。一つ目は、1955年3月号に掲載された写真である。「全マラヤ・イスラム教徒華人協会(Persekutuan Cina Islam Se-Malaya)の設立」というタイトルの下に、5枚の写真が掲載されている。写真に付された説明は以下のように伝えている。1955年2月20日に全マラヤ・ムスリム華人協会の設立集会が開催された。この組織は、マラヤにおける

イスラム教のさらなる布教(dakyah)を目的とした組織として初の組織である。場内には「イスラム教はこの世で一番」と華語で書かれたスローガンが掲げられていた[*Qalam* 56, 1955, 19; 22]。

全マラヤ・ムスリム華人協会は、シンガポールとジョホール州の華人系ムスリムにより、ジョホールバルで設立された。同協会は『南洋商報』では「馬華回教徒協会」や「馬來巫華人回教徒協会」などの名称で表記されている[南洋商報 1955.2.16; 1957.5.17; 1958.7.5]。同協会の設立は、1954年11月8日にジョホールバルで行われたムハンマド生誕祭に由来する。生誕祭ではパ

PERJUMPAAN MENUBUHKAN PERSEKUTUAN CINA ISLAM SE-MALAYA

Suatu perjumpaan kaum Cina Islam se-Malaya kerana menubuhkan persatuannya diadakan di rumah Jam'iyah pada 20 haribulan yang lalu dengan lebih dahulu diadakan suatu jamuan teh kerananya. Inilah pertama kali pertubuhan itu diadakan dengan bertujuan akan berusaha meluaskan lagi dakyah-dakyah Islam di Malaya. Cogankata-cogankata bahasa Cina yang bertulis "Di Dalam Dunia Ini Islamlah Yang Nombor Satu" ada digantung di sana. Di bawah ini ialah gambar-gambar sebahagian daripada orang-orang yang mengambil bahagian di dalam mesyuarat itu.



『カラム』1955年3月号19ページの写真

レードが行われ、各民族のムスリム約6,000人が参加し、その中にはシンガポールとジョホール州の華人系ムスリム約2,000人も含まれていた。パレードはジョホールバル市政府前の広場に到着し、各民族の代表者がスピーチを行った。その後、モスクで6,000人が参加する食事会が行われた。午後1時半から華人系ムスリムの座談会が開かれ、華人系ムスリムの統一的な組織がまだないため、そのような組織を設立することが提案された〔南洋商報 1954.11.8〕。1948年8月から1950年1月まで在イポー中華民国領事を務めた華人系ムスリムのイブラヒム・マ(馬天英)を委員長、馬俊武を副委員長とし、そのほかに9名の委員で構成される準備委員会が設立された〔南洋商報 1955.2.6〕。こうした経緯を経て全マラヤ・ムスリム華人協会が設立されるに至った。1957年5月には同協会のスランゴール支部が設立された〔南洋商報 1957.5.7〕。

二つ目の写真は、1957年3月号の『カラム』の裏表紙に掲載された写真である。スランゴール州ジンジャン(Jinjang)で撮られたこの写真の下には、「イスラム教に改宗したての華人系同胞を歓迎する記念写真」というキャプチャーがついている。また、この写真の情報として以下の記載がある。

1956年12月25日に12人の華人がジンジャンでイスラム教に改宗した。彼らは10年前にイスラム教に改宗したカリル(Khalil) 同胞の尽力によってイスラム教に改宗した。写真のなかでカリルは、黒いソンコをかぶり、トゥアン・ハジ・ファター・アヒール(Tuan Haji Fatah Akhir)の後ろに立っている。トゥアン・ハジ・ファター・アヒールは新たな同胞たちに信仰告白を教えた。スランゴール州モスク監督官のラジャ・オスマン・ラジャ・アリ(Raja Osman Bin Raja Ali)とクアラルンプールのプカンバトゥ・モスクの委員らも同席した。新たな同胞に対するイスラム教の教授は、プカンバトゥ・モスクのクルアン朗唱師(qariah) 委員に託された。1956年12月30日にプカンバトゥのマレー人学校で彼らを歓迎するお茶会が開かれ、300人の男女が主席した〔Qalam 79, 1957: 9〕。

この式典は『シンガポール・スタンダード』でも報じられている。それによると、「マラヤの現代史において最大規模の改宗式」で、ジンジャン新村の住民の商人や農民などが出席したとのことであった〔Singapore Standard, 27 December 1956〕。

ジンジャンはクアラルンプール北西部に位置する。1950年以降、イギリス植民地政府がこの地にあったゴ



Karimah Ma, anakanda Tuan Haji Ibrahim Ma sedang menyampaikan ucapan tahniah daripada ayahanda yang tidak dapat menghadiri persidangan itu. Di kiri ialah seorang Cina Muslim sedang bercakap.



Sebahagian daripada orang-orang yang hadir dalam persidangan itu.

『カラム』1955年3月号22ページの写真

ムのプランテーションを切り開き、新村(New Village)を設立した。新村は、1948年6月に武装蜂起したマラヤ共産党を鎮圧するために整備された住宅地である。日本占領期および第二次世界大戦後の混乱期に、華人のなかには合法的な手続きを取らず、人の手の及んでいない土地に住み着き、農業や養豚、魚の養殖などを行ったり、近隣のプランテーションで働いたりするなどして生計を立てる者が現れた。こうして形成された集落には、マラヤ共産党に食糧を提供したり、マラヤ共産党員をかくまったりするなど、マラヤ共産党を支援する者がいるとされた。マラヤ共産党に対するこうした支援を絶つため、イギリスは新村を建設し、道路を整備し、周辺集落から住民を新村に移住させ、住民の生活を管理し、その動向を可視化できるようにした〔Lim and Fong 2005, 25-27〕。ジンジャンには、クアラルンプール北部に位置するスガイトゥア、バトゥケブ、スラヤン、ウルクラン、チュラスなどにあった華人集落の住民が移住してきた〔Yip 2015〕。今日半島部マレーシアには新村が400カ所以上存在し、新村の



Gambar kenang-kenangan kerana meraikan saudara-saudara dari kaum Cina yang baharu memeluk Islam di Jinjang Selangor. Duduk tengah ialah Tuan Haji Fatah Akhir yang Dipertua Jabatan Agama Selangor.

『カラム』1957年2月号裏表紙の写真

人口の大部分は華人である。ジンジャンは新村の中でも最大規模を誇り、華人が集住する住宅地として知られている[潘 2015]。

マレーシアにおける華人系ムスリムの位置付け

今日のマレーシアには、イスラム教を信仰する華人が約4万2,000人存在する。彼らは華人社会においても、またムスリム社会においても少数派とされる。華人系ムスリムの華人人口全体における割合は0.65%であり、ムスリム人口全体における割合は0.24%である[Department of Statistics of Malaysia, 2010, 82]。マラッカ海峡地域には、「イスラム教徒になること」と「マレー人になること」が同義であるという認識が歴史的に存在した。その認識のもと、20世紀以降、今日の半島部マレーシアとシンガポールにあたるマラヤ地域でマレー人という人間集団の概念化が進展し、宗教(イスラム教)と民族(マレー人)が不可分なものであるととらえられるようになってきた。とりわけ1970年代以降、マレー人などブミプトラへの資源の公的な配分において政府が積極的に介入する新経済政策が開始し、マレー人およびブミプトラという概念から華人とインド人が排除される論理が強まる中で、華人はたとえイスラム教に改宗しても「新たな同胞」というカテゴリーに分類され、マレー人およびブミプトラとしては受け入れないという方針が確立していった[Nagata 1984, 195-197; Ma 2005, 103]。華人の間に

も、イスラム教はマレー人の宗教であるという認識が強く、華人であることとムスリムであることは両立し難いと一般に認識されている[Ma 2005, 102; 2011, 30-34]。華人系ムスリムは、華人社会における認識においても、マレー人ムスリム社会における認識においても、周縁的な存在であるとされる。

マラヤ地域の華人系ムスリムのなかには、回族など中国のムスリム・コミュニティの子孫であり、生まれながらにムスリムである人たち¹⁾と、改宗してムスリムになった人たちがいる。このうち改宗してムスリムとなった人たちについて、婚姻に伴い改宗した華人系ムスリムやマレー人と華人との間に生まれた混血系ムスリムなどを中心に、華人社会とマレー人ムスリム社会双方において周縁的な存在として位置づけられる華人のアイデンティティをロージー・マが論じている[Ma 2005; 2011]。また、1960年代後半から1970年初めのマラヤ地域では、華人など非マレー人の間にイスラム教に改宗する動きが顕著であり、これについてジュディス・ナガタがマレーシアにおける政策の変化とそれに呼応した改宗者の動機に重点をおいて論じている[Nagata 1984]。ナガタは改宗者の動機として、新経済政策が開始される中でマレー人と同等の経済的な権利を得ようとする経済的な動機、「華人は共産主義者」という疑念を晴らし政治的に安定した立場を

1) トレンガヌの雲南系ムスリムについて[Tan 1991]がある。また、福建省泉州を出自とするペナンのコイ(Koay/郭)氏について[王 2004]がある。これらに加え、1950年代以降の改宗者も含めて[Ma 2005]が扱っている。

確保したいという政治的な動機、自己啓発や自分探しという精神的な動機などを挙げている[Nagata 1984, 194-199]。

しかしこれらの研究は、1950年代および60年代のマラヤ地域における華人のイスラム教への改宗をめぐる動向を直接論じるものではない。この時代には、トゥンク・アブドゥル・ラーマン首相の提案により1960年に設立されたマレーシア・イスラム福祉機構(Pertubuhan Kebajikan Islam Malaysia, PERKIM)が、非マレー人・非ムスリムに対してイスラム教への改宗を促進する活動を積極的に行ったとされる。ナガタとマは、PERKIMが非ムスリム、特に華人へのイスラム教の布教を目的として設立され、華語、広東語、福建語などでイスラム教の布教が行われたことに言及している[Nagata 1984, 168; Ma 2005, 103]。しかし当時の状況がどのような様子であったのかはあまり論じられていない。以下では、シンガポールで発行されていた『ストレイツ・タイムズ』と『ブリタ・ハリアン』および『南洋商報』を資料とし、イスラム教に改宗する華人を取り巻く1950年代および60年代の状況を探ってみたい。

改宗者の増加

マラヤで発行されていた日刊紙には、1950年代から1960年代にかけて、イスラム教に改宗する華人についての記事が掲載されていた。孤児として育った20代の華人男性2人がペナンで改宗した記事や[Straits Times, 27 December 1956]、改宗してムスリムとなった華人カップルがシンガポールで結婚式をあげた記事[Straits Times, 23 November 1958]、従業員がイスラム教に改宗しても解雇せずに改宗者に対して寛容な精神で接することを求める全マラヤ・ムスリム布教協会ペラ支部長の発言を伝える記事[Straits Times, 5 February 1959]、1960年にペラ州で25人が改宗したことを伝える同支部長による報告[Berita Harian, 6 Januari 1961]などの記事がある。

華人の改宗者に関する記事は1964年に非常に多くなっている。これらの記事はこの年にスランゴール州クラン、ジンジャン、プタリンジャヤで改宗式が行われたことを伝えている。1月1日にクランのバトゥティガ通りにあるイスラム教訓練センターで改宗式があり、華人14人が改宗した。改宗式の主催者はスランゴール州マレー人宗教・慣習局のカディであった。

改宗式には、PERKIM事務局長のハジ・ムビン・シェパード(Haji Mubbin Sheppard)や、同幹部のイブラヒム・マ、マラヤ・イスラム・カレッジの講師でウスタズのマフユディン・ムサ(Mahyuddin Musa)のほか、宗教局やPERKIMの幹部たちが出席した[Berita Harian, 2 January 1964]。また、3月にはジンジャンで、5月にはプタリンジャヤで、7月にはクランで、華人がイスラム教に改宗する改宗式が行われた。ジンジャンでは華人14人が、プタリンジャヤでは華人15人が、クランでは華人18人が、イスラム教に改宗した。[Straits Times, 30 March 1964; 18 May 1964; Berita Harian, 13 July 1964]。いずれの改宗式にもスランゴール州宗教局とPERKIMから幹部が出席していた。PERKIMは設立以降、1963年に36人、1964年に99人をイスラム教に改宗したと報告していた[Berita Harian, 14 February 1965]。

華人の改宗は新聞記事となるほど珍しい事例であったこと、そして集団的な改宗が行われていたことがわかる。

マラヤ連邦政府と 香港・台湾の華人系ムスリムの積極的な関与

非マレー人・非ムスリムに対するイスラム教の布教、とりわけ華人に対する布教は、ラーマン首相のもとでかなり積極的に行われていたようである。PERKIMの設立もその例である。PERKIMは設立の経緯を以下のように説明している。1960年8月19日、ラーマン首相はクアラルンプールの首相公邸で、イスラム教をマラヤ連邦に広めるための機構を設立することに関心をもつムスリム数人と会合を行った。ラーマンは、マラヤのすべての民族、とくに華人を対象に、イスラム教をまだ信仰していない人たちにイスラム教を教えることを機構の第一の目的とするべきだと述べ、2万リンギの小切手を機構の設立に寄付した。ラーマンはPERKIMの設立を各州のマレーの王たちに報告し、各州に支援を依頼した[PERKIM 2017]。

非マレー人・非ムスリムに対する布教について、ラーマン自身が語った記事は収集できていないが、ラーマンおよびマラヤ連邦政府に香港や台湾から華人系ムスリムを招き、中国系言語²⁾でマラヤの華人に布教す

2) マレーシアやシンガポールでは中国語を華語と呼ぶようになっている。しかし華語は中国大陸の普通語および台湾の国語にあたるマンダリンを意味する語である。本稿で扱う中国語は、広東語や福建語である可能性もあるため、資料で“Chinese language”や“bahasa Cina”として言及される言語を中国系言語と表記する。

る考えがあったらしいことを伝える記事がある。

香港や台湾には、共産党政権下となった中国から避難してきたムスリムが合わせて約90万人いて[*Berita Harian*, 21 November 1958]、香港には約50万人の避難者が滞在していたとされる[南洋商報 1957.7.4]。ラーマンは1958年5月31日に日本から香港経由でマラヤに帰国する際に、香港に滞在する華人系ムスリム避難民をマラヤに受け入れることを国連香港支部より依頼された。マラヤへの入国を希望する者は3,000人から4,000人いると伝えられた。ラーマンはこれら避難民のマラヤへの受け入れを検討するとしながらも、入国希望者があまりにも多い場合は資格や条件などを設けて入国許可者を選ばざるをえないと回答した[*Berita Harian*, 16 June 1958]。

ラーマンのこの対応にUMNOから批判が出た。これに対してキール・ジョハリ(Khir Johari)教育大臣は、ラーマンには何千人も受け入れる意図はなく、華人にイスラム教を伝えるには中国系言語を通じて伝えるのが最善であり、ラーマンはその文脈で香港からのムスリム避難民の受け入れを検討していると説明した[*Berita Harian*, 28 October 1958]。

香港のムスリム避難民を視察する調査チームが11月にマラヤから香港に派遣された。調査チームは、ジョホール州イスラム教局長、全マラヤ・イスラム協会(汎マレーシア・イスラム政党の前身)幹部、UMNO最高評議会メンバー、イブラヒム・マなどで構成された[*Berita Harian* 10 November 1958]。その報告を受けたマラヤ連邦政府は香港のムスリム避難民を受け入れないとの決定を下した。ラーマンはこの決定について、調査報告によればマラヤへの入国希望者の多くは専門職従事者であり、彼らが置かれた状況は想像していたほど悪いものではないと判断したためだと説明した[*Berita Harian*, 27 November 1958]。

香港に滞在する華人系ムスリムのマラヤに対するアプローチはその後も続いたようである。1959年7月には、マラヤの非ムスリムの間に存在するイスラム教に対する誤解を解くことを目的に、5名の華人系ムスリムがマラヤを訪問した。全マラヤ・ムスリム布教協会がこれを受け入れた[*Singapore Free Press*, 13 July 1959]。

また、PERKIM設立直前の1960年8月5日に、台湾からマラヤを訪問した4名の華人系ムスリム布教師がアブドゥル・ラザク副首相兼防衛大臣と面会した。台湾からの訪問団には、中興立法委員や台湾のム

スリム華人協会の指導者などが参加していた。彼らはマラヤの華人にイスラム教を布教するため、台湾から有資格者を派遣する可能性を視察する目的でマラヤを訪問していたと伝えられている[*Berita Harian*, 6 August 1960]。

これと前後して、全マラヤ・ムスリム布教協会やマラヤ連邦政府は、中国系言語によるイスラム教の普及を積極的に進めていた。全マラヤ・ムスリム布教協会の提案を受け、1959年8月にイポーで英語と中国系言語でイスラム教を教える教室が設置された。華人とイギリス人7人が同協会の幹部の指導のもとで学んでいると報道された[*Berita Harian*, 1 August 1959]。また、マラヤ連邦政府は1961年9月に、クラブを華語に翻訳する機関を設立したことと、イブラヒム・マがその長を務めることを発表した。この機関ではクルアンの翻訳も計画しているとのことであった[*Berita Harian*, 30 September 1961]。

1950年代・60年代のマラヤ地域の社会と国家

以上の記事が断片的に伝える情報を整理すると、以下の事柄を指摘することができるだろう。

第一に、1950年代・60年代当時、ラーマンやマラヤ連邦政府・各州政府関係者、PERKIM幹部は、華人のイスラム教への改宗を促進するには中国系の言語を通じて布教活動を行うことが重要であると認識していた。おそらくその背景には、1950年代を通じて華人コミュニティが華語教育の維持や華語の公用語化を要求してきたことの影響があると思われる。言語をめぐる政治の中で、マレー人は「言語は民族の魂である」と主張してマレー語の国語化と国語による国民教育制度の整備を求めた。華人もまた「言語は民族の魂である」と主張し、華語で教育を行う自由を保障すべく、華語教育を国民教育制度の一部に位置付けるよう求めた。こうした交渉を経験したラーマンや政府関係者は、華語および中国系言語を尊重しながら華人にイスラム教を普及することが重要であるという認識をもっていたものと思われる。

第二に、華語によるイスラム教の普及において、香港および台湾の華人系ムスリムが積極的に関わろうとしていた。彼らの多くは共産化した中国から逃れてきた人たちであると言われており、新たな天地を探して行き先を模索していたことが推察される。マラヤ共産党の蜂起と中国における共産党政権の成立により、

マラヤ地域と中国大陸との往来は1949年以降厳しく制限されるようになった。こうした厳しい制限が香港および台湾からの入国者にも適用されていたのかについては改めて確認する必要があるが、中国系言語を操れるムスリムという立場を生かし、マラヤ地域に活路を見いだそうとしていた中華圏の華人系ムスリムの存在は、中華圏とイスラム圏の交わる場であるマラヤ地域をとらえるうえで興味深い事例であると思われる。

第三に、1940年代から1970年代の間にマレー人概念がどのように展開したのか再検討の必要がある。ナガタは、ラーマンはマレー人概念を開かれたものとして考えており、改宗するなどしてマレー人の資格を満たす者はマレー人として受け入れ可能であると発言していたと指摘する[Nagata 1984, 196-197]。ラーマンはイスラム教に改宗した華人をどのように位置付けてようとしていたのか。イスラム教を受容した華人は華人としてのルーツを消し去りマレー人になっていく存在としてとらえていたのか。それとも、中国系言語を通じて華人としてのルーツを維持しながらマレー人でもある「中国系マレー人」というカテゴリーがマレー人社会の中に形成されることを想定していたのか。華人に対するイスラム教の布教を積極的に進めた人たちは、どのような認識を持っていたのか。それがどのようにして1970年代以降、先行研究が指摘するような「イスラム教はマレー人の宗教だが、イスラム教に改宗してもマレー人にはなれない」という認識を形成していくようになったのか。1946年にマレー人の定義は、ムスリムでマレー語を話し、マレーの慣習を実践する者として明文化されたが、もともとこの定義は現実とそぐわない部分が多々あった。そうした現実との矛盾を1970年に至るまでにどのように調整していったのか。これらについて改めて議論することの意義は大きいと思われる。

今回は使用した資料が限定的であるため、まだ不明な点も多い。マラヤ連邦政府の公文書やマラヤ地域の各地域を拠点とする新聞記事、香港や台湾の華人系ムスリムの動向を伝える資料などを収集することにより、上記の3つの観点に関する理解がより深まるものと思われる。

参考文献

- Department of Statistics, Malaysia. 2010. *Population and Housing Census of Malaysia: Population Distribution and Basic Demographic Characteristics*.
- Lim, Hin Fui and Fong Tian Yong. 2005. *The New Villages in Malaysia, the Journey Ahead*, Kuala Lumpur: Institute of Strategic Analysis & Policy Research.
- Ma, Rosey Wang. 2005. "Shifting Identities: Chinese Muslims in Malaysia", *Asian Ethnicity*, 6(2), 89-107.
- . 2011. "Being Muslim and Chinese in Malaysia", Lee Hock Guan and Leo Suryadinata eds., 2011, *Malaysian Chinese: Recent Developments and Prospects*, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, 26-44.
- Nagata, Judith. 1984. *The Reflowering of Malaysian Islam: Modern Religious Radicals and Their Roots*, Vancouver: University of British Columbia Press.
- PERKIM. 2017. "Tunku and PERKIM", PERKIM website, <http://www.perkim.net.my/tunku-dan-perkim/>.
- Qalam* 56, 1955. "Perjumpaan Menubuhkan Persekutuan Cina Islam Se-Malaya", Mar. 1955, 19 and 22.
- Qalam* 79, 1957. "Keterangan Gambar Kulit Belakang", Feb. 1957, 9.
- Tan, Chee Beng. 1991. "A Note on the Orang Yunnan in Trengganu", *Archipel*, 42, 93-120.
- Yip, Yoke Teng. 2015. "Jinjang grows out of bad reputation", *The Star Online*, 12 May 2015.
- 潘麗婷 2015 「匯集雪隆郊区各籍貫華裔增江最大華人新村」『南洋商報』官網、2015年11月16日。
- 王琛發 2004 『姓郭橋——中国回族后裔在馬來西亞的歷史見証』馬來西亞檳城：白崎回族文化復興工委、檳城古迹信託會。